

高洋丸を迎えるために先行して4月20日に網走に着いています。

高洋丸は宗谷海峡からオホーツク海に入るとまだ流氷があり、進路を2回閉ざされ網走港に出港から1ヵ月後の5月1日に着岸しました。

この間、船内では「はしか」が流行り、子供・大人合わせて約30人がなくなったとも云われていますが正確な数字は未確定です。

網走で休養後の5月2日、中央道路を使い5月7日に北見クネネツ原野に到着し、開墾の鍬が初めて北見の地に入りました。

直寛は移民団の初代社長として澤本・前田とともに開拓事業に取り組めます。

しかし、直寛は明治30年(1897年)8月下旬一時高知に帰郷し、翌年再来道し浦臼にある武市安哉が経営する農場(聖園農場)に立寄った時、武市急死により農場を継ぎ、北見には戻らず、農場経営より布教活動を中心としています。

直寛の布教活動は旭川まで広げジョージ・ペック・ピアソン宣教師夫妻の活動にも協力し、札幌第一教会で明治44年(1911年)9月6日 58歳の生涯を終えています。

■ 北光社の実務者 澤本 楠弥

北光社の実務を担ったのは、副社長の澤本楠弥(安政2年 1855年12月15日土佐の国長岡郡介良村生-明治37年 1904年10月1日没)です。

澤本は前田駒次と共に、洪水・冷害などに立ち向かう開拓民の心の支えとなった他、道庁へ水害救済受給や道庁からの救済に応じて屯田兵村三区から上常呂に至る道路工事を請け負いました。

この道路工事は現金収入の機会をもたらし、入植者たちが利用する道路となり次第に全農の幹線道路が開かれることとなります。



▲北光社2代目社長澤本楠弥

他に、野付牛村戸長役場が開設(明治30年 1897年)されると、屯田兵の井関安太郎と澤本が総代人に選ばれ、村有財産や米倉の米処分、土木工事の施工の決定に総代人の署名が必要である重要な要職に赴きました。

澤本の功績として、前田駒次と共に鉄道敷設に大きな功績があります。

澤本は、同郷の道庁職員 国沢鉄道部長に会い、当時旭川から釧路に達する幹線が第一期線であり、十勝の利別から北見の相内に至る第二期線【*網走本線から池北線、旧ふるさと銀河線と名称変更】が、第一期線に昇格し鉄道が速設されることを要請したことを受けた国沢は、同線の視察を行う旨を電報で知らせ、澤本と前田は乗馬で陸別から利別太(現池田)に到着、国沢に嘆願した積極的活動が功を奏し鉄道の敷設される道を開きました。

野付牛開駅は明治44年(1911年)9月25日ですから、汽笛の音を聴くまでも無く持病の